

『明治開化安吾捕物帖』における登場人物の役割の変化

人文学部人間文化課程アジア文化コース
日本近現代文学ゼミ 藤谷周子

論文要旨

【第一章】

坂口安吾『明治開化 安吾捕物帖』（以下『安吾捕物帖』）は、『小説新潮』に 1950 年 10 月から 1952 年 8 月まで連載された。基本的に一話完結で、全 20 篇となっている。初出時には「明治開化 安吾捕物」の主題の下に各話のタイトルが付けられていた。

本稿では『安吾捕物帖』の特質を把握するために、第一章で『安吾捕物帖』の登場以前の時点で既にジャンルとして成熟していた、捕物帳小説の特徴を明らかにした。それは以下の二点である。

- ①探偵役である主人公を読者に印象付けるように描いている点
- ②時代考証的な要素の有無に関係なく、「過去の風景」を描き出している点

しかし、『安吾捕物帖』はこれら二点の特徴を具えていない。①については、『安吾捕物帖』の場合、真実を言い当てる探偵である結城新十郎は主人公として描かれていない。②については、「過去の風景」を描く際に重点が置かれている部分が、従来の捕物帳と異なっている。従来は、事件に関連のない風俗も描かれていた。しかし『安吾捕物帖』では、事件の背景や事件当事者の位置づけを読者に示すために、時代の風物を利用している。

また、第一章では『安吾捕物帖』の先行研究を整理し、舞台設定や風俗が実際の資料を参照して描かれていることや、登場人物に勝海舟を配置したことによって戦後批判の要素が含まれているという見方があることを示した。

【第二章】

第二章では、安吾の探偵小説観を探るにあたり、安吾自身の探偵小説受容の様相をはじめに示した。その後、探偵小説の「文体」、「形式」、「内容」の三つについて、それぞれ安吾がどのように理解していたかを解明した。受容については、安吾が戦時中に大井広介らと探偵小説の犯人を当てあう「推理ゲーム」をしていたことを挙げ、安吾にとって優れた探偵小説とは、作者と読者がフェアな関係であるかのように仮構される「推理ゲーム」の体裁を保つものだということを明らかにした。その基準に基づき、安吾は優れた探偵小説が日本より海外に多いと述べている。

「文体」に関しては、安吾は誇張表現が不要であるとし、その観点から小栗虫太郎の作品を批判している。探偵小説を論じる際は、主に題材やトリックに焦点が置かれている。例えば江戸川乱歩は「英米の短篇探偵小説吟味」（『寶石』1949 年 8 月～1950 年 7 月）の中で作

者ごとの文章や文体の差異、自分の好みなどを述べているが、探偵小説の文章はこうあるべき、といったような立場は取っていない。こうした点を踏まえると、それまで探偵小説をめぐってあまり論じる対象とされていなかった「文体」にも目を向け、「必要な事柄だけを書くべきだ」という明確な見方を持っている点で、安吾が独自の立ち位置にいたと見ることができるのではないだろうか。

「形式」については国内外を問わず「マンネリズムに陥っている」と批判的な立場に安吾はいた。真実を当てる「偉い探偵」と、常に推理を外す「トンマな探偵」が登場する形式を生み出したのは、フランスのエミール・ガボリオールであることを安吾は指摘している。安吾はガボリオールの形式が模倣され続けているとし、マンネリズムからの脱却を目指していたと考えられる。

続けて「内容」については、安吾が想定していた優れた探偵小説の条件を整理し、以下の三点にまとめた。

- ①謎のために人間として不自然な行動を登場人物にさせてはならない
- ②警察の基本的な捜査で発見されるような手掛かりを黙殺してはならない
- ③探偵が真相を導くために持っている情報は、解決編の前に全て示されなければならない

さらに、本論では安吾が日本の探偵小説の学術的である面を批判し、殺人方法の複雑さよりもアリバイの作り方に意匠を凝らすべきだと述べている点に注目した。これらの点から、安吾は読者が推理を働かせば、解決篇より前の部分を読んだだけで真相が看破でき、読者の推理が外れたとしても納得できる真相が用意されている作品こそが、「推理ゲーム」として成立する優れた作品であると考えていたのではないだろうか。

【第三章】

第三章の冒頭では、安吾が「読者への口上」で語った捕物帖の構成要素を五つに分け、『安吾捕物帖』全篇の構成を示した。その上で、主要登場人物、語り手、探偵の役割を担っている人物の三つについて、それぞれの役割の変化を論じた。

第一節で主要登場人物として論じたのは、結城新十郎、勝海舟、泉山虎之介、花廻屋因果である。結城新十郎は、作中において真実を突き止める名探偵であるが、主人公として魅力ある人物として描かれていない。彼は第1話「舞踏会殺人事件」において「洋行帰りの新知識で、話の泉の五人分合わせたよりも物識り」、「西洋博士、日本美男子、紳士探偵、結城新十郎の名は津々浦々になりひびき、新聞の人気投票日本一」と設定された人物である。この過剰な設定は、新十郎自身が関係者の協力や情報を得て、捜査をよりスムーズに進めるために役立っている。また、彼自身は第19話「乞食男爵」において、探偵の務めを「正義のために戦うこと」と述べていた。新十郎にとっての「正義」とは、単に犯罪者を罰することではない。彼は時として法を無視した行動を取っている。真相を警察に伝えない時もあるれば、加害者を擁護したり、被害者を非難したりする時もある。そのことから、新十郎はただ真相

を暴くだけではなく、事件当事者に寄り添い、彼らの人間性を読者に印象付ける役割を担っていたと考えられる。

勝海舟は実在した人物であり、安吾は「読者への口上」で彼のことを「明治きっての大頭脳」であるとしている。本作での勝海舟は、結城新十郎と相互に信頼関係を築いている。海舟も推理をするが、真犯人を当てたのは第 12 話「愚妖」のみである。また、第 17 話「狼大明神」からは登場しなくなる。海舟の不在は、彼の隠居という設定と、『安吾捕物帖』が次第に事件当事者をより詳細に描写する傾向を強めたことが、齟齬を来したからだと考えられる。

新十郎が住む長屋の左右の部屋にいるという設定の、泉山虎之介と花廻屋因果について検討したところ、海舟との関係に従い役割が変化することが分かった。彼らは幫間のような役回りで、推理をしても当たることがない。そして、二人とも第 19 話「乞食男爵」から登場しなくなってしまう。これは事件関係者と関わりの薄い海舟が姿を消したことで、海舟と繋がり深かった虎之介と、虎之介と行動を共にしていた花廻屋が連鎖的に姿を消した、と見ることが出来る。

次に、語り手に注目し、全 20 篇における語り手の手法を分類した。その結果、語り手の立ち位置は全篇を通して変化していない、という結論に至った。語り手は物語の舞台となっている開化期と『安吾捕物帖』発表時期の世相を同時に語っており、物語世界と現実世界の両方に立っているように見せる。それは、読者に同時代の情報を伝えて触発することで、物語世界（開化期をモチーフとする）をより明瞭に伝える効果を生む。さらに、「私は」と自身を実体化して情報を語る時もある。また、「(犯人をお当て下さい)」というように丸括弧を用い、読者に直接語りかけることもある。この二つの語りは、探偵小説は読者と作者の「推理ゲーム」であるという安吾の考え方の表れであったのではないだろうか。

最後に、各話にのみ登場し、探偵作業を行った人々に注目した。まず、彼らの立場と、探偵作業をする謎との関係性を整理した。その上で、警察官であり、自身の好奇心で探偵作業を行った点で共通する、第 12 話「愚妖」の菅谷巡査と、第 20 話「トンビ男」の楠巡査を比較することで、『安吾捕物帖』で描かれた探偵の役割について考察した。

まず、結城新十郎との関係において、菅谷巡査は探偵（新十郎）に対する助手であるかのような上下関係が確認できる。それに対して楠巡査は、探偵・助手の関係というよりも、いつか自分と同じレベルにまで相手が育つことを期待する師匠（新十郎）に対する弟子の役割に近いことが分かった。また、楠巡査は捜査の過程で幫間のような役割も担ったため、登場しなくなった虎之介と因果の役割も担っていると見られる。

『安吾捕物帖』は当初、海舟、虎之介、花廻屋の三人の役回りによって読み物としての面白さを備えていた。しかし、回が進むにしたがって、事件の背景や関係者たちに関する記述を重視するあまり、関係者と関わりを持ちにくい三人を登場させる必然性がなくなった。そこで事件と深く関わり、かつ読み物としての面白さを加えるために、一話限りの探偵役を登場させるに至ったのではないだろうか。主要登場人物は、設定から逸脱することはできない。

そこで、それぞれの事件に応じて探偵役を造形することで、読者の目を事件関係者に向けさせようとしたのではないだろうか。

【第四章】

まとめの章では今後の研究の可能性を検討するにあたり、『安吾捕物帖』続編の可能性があったことや、テキスト内部に安吾自身の歴史や犯罪への興味が見られることを示した。また、第二章で触れた安吾の目指していた探偵小説の形式のマンネリズムの打破が、第三章で触れた一話限りの探偵役に表れていると結論付けた。

安吾にとって「推理ゲーム」とは、読者が楽しみながら作者の提示する謎について考えることができるものだったと考えられる。その成立を目指して安吾は捕物帖に取り組んだが、新十郎が真実を暴く証言の中で、読者に示されなかった情報が含まれている場合もあったため、その試みが成功したとは言えない部分もある。しかし、本論では「投手殺人事件」や「南京虫殺人事件」といった安吾の他の探偵小説にも着目し、探偵小説の形式に関して、安吾が『安吾捕物帖』以後も試行錯誤を続けていたことを指摘し、稿を終えることとした。

【主要参考文献一覧】

- ・大井広介「犯人あてと坂口安吾」(亀田勝一郎ほか編「現代国民文学全集第二十七巻月報」角川書店 1958年)
- ・広田喜作「フランスに於ける探偵小説の変遷」(『松山商大論集』第11巻第2号 1960年7月)
- ・江戸川乱歩『幻影の城主』(『江戸川乱歩全集』第17巻 講談社 1979年)
- ・一井襄「民衆文化の廣大(その一)―捕物帳小説の場合」(『人文学部紀要』(神戸学院大学)第2号 1991年3月)
- ・郷原宏『名探偵事典 日本編』東京書籍 1995年
- ・藤原耕作「『明治開化 安吾捕物帖』と近代主義」(『福岡女子短期大学紀要』第54号 1997年12月)
- ・小倉孝誠『推理小説の源流 ガボリオからルブランへ』淡交社 2002年
- ・江戸川乱歩『幻影城』(『江戸川乱歩全集』第26巻 光文社 2003年)
- ・縄田一男『捕物帳の系譜』中央公論新社 2004年
- ・藤原耕作「坂口安吾の推理小説」(『国語の研究』第32号 2006年11月)
- ・野崎六助『捕物帳百年 歴史の光と影』彩流社 2010年
- ・今田良介「推理小説としての『明治開化安吾捕物帖』」(『中央大学国文』第57号 2014年3月)
- ・篠崎菜々子「坂口安吾『明治開化 安吾捕物帖』にみる多重構造と変遷」(『愛文』第50号 2015年12月)